

第四十八回中央教化研究会議 記念講演

生かされている使命

三田村 日正

司会 それでは、少し早いですが、宜しければ三田村猥下に、記念講演「生かされている使命」と題しましてご講演いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

三田村 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

初めての方も多いと思いますので、改めてご挨拶申し上げます。私は現在、京都大本山妙顕寺の貫首と、千葉県平賀本土寺の貫首、両方を兼務しております。なお、それまでは、神奈川県逗子の法勝寺というお寺で約五十年近く住職をし、保育園、幼稚園等をやって参りました。その関係で、今も学校法人の方は理事長を務めさせて頂いて、これからの子供たちが二度と再び銃を持たないように、そして平和な世の中になりますように、子供たちにも色々なことでお話をしたりしている日々でございます。

今日は与えられました表題が、ここにありますように、「生かされている使命」という題です。もうすでにご存じの方もいらっしゃいますが、私は大東亜戦争に学徒出陣で参りまして、本当にこうして今、生かされていて、今日のようなこの日を与えられてということだけでも大変有り難く思っております。特に昨日と本日と、石橋湛山先生のお

話を中心にしまして、これからの日本をどうするかというようなことで皆さん方の真剣なる所のご意見を聞くことが出来まして、私も本当に嬉しく思います。

私は、年はすでに九十三。あと半年たつと九十四歳で、明日をも知らない体ではございますが、せめて遠く亡くなった戦友達の為にも、実際の戦争というものはこうだったんだと、二度と戦争を起こしてはならないんだということを中心に、お話しさせて頂きます。従いまして、理論的な事は先程も報告がありました。私も昨日は第二分科会に出ておりましたので、本場に皆様方の色々なご意見を伺いまして、大変頼もしく、是非これを進めて頂きたいなと思つて、密かに喜んでゐるわけでございます。

さて、資料に基づいてお話しするわけでございますが、全部で三枚か四枚ございます。最近ですね、やっぱり戦後七十年ということで、新聞社などが、非常に取材が多かつたわけでございます。ところが、早くも昨年の八月十日号に「生かされている使命」という記事、これを『日蓮宗新聞』が最初に出したわけでございます。『佛教タイムス』の人も来まして、一緒に取材に応じましたので、『佛教タイムス』にも掲載されました。私は、それまでは戦争の話というものは一切したことがありません。したことがないというより、出来なかつたんですね。しかし、去年の場合ですが、「いよいよ来年は七十年か」と。年も取つたのでというので、とうとう口火を切つて出したのがこの新聞でございます。皆さん、ご覧になりましたか、去年。『日蓮宗新聞』もね、こんなにいいのを出しながら、あんまり読まれていないのです。というのは、これが出た時に、どこからも反響がないんですよ。せめて一人ぐらい「出てたな」って言うてくれるか、或いは「なんだ、三田村さん戦争に行つていたのか」とか言うてくれる者が、誰もいない。本当に反響がないんですね。ところが、今年のお盆に言われたんです千葉の平賀の方ですが、お経に、棚経に行つたんです。そしたら「貫首さん、新聞に出てましたね。読みました。特攻隊なんです」と。それが、なんと『日蓮宗新聞』じゃなくして『千葉日報』なんです。戦争のない国にしたいという内容で、非常によく書かれています。檀

家の人は『日蓮宗新聞』を取ってないで、こういうものを読んでいます。ですから、一応これも入れて、今日の資料にしました。

もう一つ、大きな新聞ですが『読売新聞』但し全国版でなくして、関西方面に充てたようですが、「九十三歳の貫首、今語る特攻」。このあとが好きだったんですね、「京都妙顕寺、三田村さん」という表題で書いてある。何故かといいますと、非常にみんな貫首というのは偉いんだと思って、緊張しちゃうんですね。非常にいいところを突っ込んでくる。さすがに読売新聞は証拠が欲しいというので、今日は置いてきちゃいましたけど、「第百飛行団の軌跡」という、いわゆる実際の戦争に行ったときの記録を貸してくれといって貸したんですが、「京都妙顕寺の三田村さん」という題で出して、これも非常によく書いておられます。

さて、本題に入ります。ご存じと思いますが、戦争というのはですね、今日もいろいろと人権の問題等が出ましたが、ダメなんです。どうしても当時の政府、国会が決めてしまいます。秘密のうちに戦争というのは始まってしまってますね。私もそれを直に体験して、「なんかおかしいな、おかしいな」と思ってる内に、まず大学自身がおかしくなります。教練も中学からやってきましたから、教練ぐらいだったらと思って、やがて徴兵。そういうことがありますから、あまり気にしませんでした。しかし、立正大学に入った時、教練は教練でいいです。ただ激しくなっただけで、語学なんです。普通は英語、そして、第二外国語はドイツ語が多かったですね。私も教わりました。それが、いつの間にか支那語をやれという、中国語ですね。北京会話です。私も、第二外国語は支那語をやりました。ところがね、北京会話の時間は代返ができないんですよ。普通だったらば、名簿を基に「三田村」とか何とか言うんですけど、「サンレンチョンチュン」って耳が慣れてないから欠席になっちゃうんですね。そういう具合に、まずこんな所が変わりました。

それから、もっと驚いたのは、『日本精神』という大川周明さんが書いた、もう毎年何回も読んでるんですが、講

義に『日本精神』というのがやらされる。「なんだ、去年もやったけど、また今年もか」という具合に、徹底的にやられました。

他には、学内の集会です。二枚目にあると思いますけど、私は講演部と芸能部と、両方入っております。それで、例えば五人でも十人でもどっかの教室で放課後集まるというときには、ちゃんと届け出をしなければ許可されませんでした。大学ですよ。今と違って、とにかく集会をするには、別に悪い話をしてるんじゃないんですけど、そういう規則になってしまいました。

それは、大学にはすでに学生会が解散されて、報国会になりました。ですから、ここにたまたま何枚ありました。それが、うちの二つをコピーしましたが、これは専門部のときですね。宗教科でしたから、「本年度、立正大学報国会講演班の幹事を命ずる」。それから「立正大学報国会芸能班幹事として、よくその任を達せり、よってここにその労を多とする」。守屋貫教先生という方が学長です。守屋先生は、私が在学中にお亡くなりになってしまいましたけど、そういう具合にして、いきなり戦争ではなくて、周りが段々、食べるものも全てが変わってしまうということがありました。

それから、食べるものは配給ですから非常に苦労しました。みんなで食べる場所を探し歩くんです。一番今でも覚えていますが、あるとき熊本の松本という友人が、「おい、三田村、一番安くて食べれるところあるから、どうだ」と、つい行ってみました。そしたらば、いわゆる麦そのままです。それをばあつと煮て、お新香があつて、みそ汁。確かに安くておいしい。それほど一番食べ盛りにおなか为空いていたのを覚えています。

また、あの当時は何も娯楽がなく、映画ぐらいしかありませんので、まず本を買います。岩波本の一つ星が二十銭です。ところが、いつの間にか発禁になる本が出てくるんです。私は知らなかったので、一回買って、大崎校舎へ行くの丁度、五反田の橋の上で刑事に捕まっちゃいました。「おい、ちょっとそれ見せろ」と。当時は川のそばに交番

がありましたから、「こんなもん読んじゃだめだ。その本は発禁になってるんだぞ」と。どうしてかと聞いても「これはだめだ」と。その題は、今でも覚えてますが、『煉瓦女工』という題の本でした。女の子が、自分の家が貧しいので、煉瓦工場へ行って働いている。それを書いたのが出たんですが、そういうものは全部発禁です。発禁本というのは、それから手に入らなかつたということもあり、読みたかつたなど。

さて、その次にもう一つ、『日蓮宗年表』にありました「立正大学創立四十周年祝賀会、東京九段軍人会館において開く」。年表には、ただこれしか書いてありません。しかし、何しろ当時のことですから、こういった準備も大変。また、学生も非常に張り切って四十周年をやるうというので、私は芸能の方に入っていましたので、演劇をやることにしました。その内容が二部に分かれました。一つの方は軍事物、戦争のものでした。私は、ないお金を立ち見しながら見た歌舞伎がいいなと思って、岡本綺堂さんの『修禅寺物語』をやるうと。みんなが一致して、あれはまだ著作権がありましたから、岡本綺堂さんのおうちへ行って、奥さんに許しを得て、許可を取ってから練習を致しました。なかなか練習が大変でした。あるときは教練の演習の間にセリフ合わせをしたこともありました。

当日が来ました。開会から始まって、いよいよ我々の番になって、三幕あるんですよ。大変なんですよ、あれは。かつらをかぶったり、衣装もそうです。全てが大変なんです。三幕あるうちの第一幕目の途中で、「中止」と上の方から。少佐かな。軍人が見ている、「中止しろ」と言うわけ。会場もがやがやしたんですが、やむをえず中止しました。「責任者、誰だ」と言うから、私が「自分です」と。そうしたらば、早速憲兵隊に引っ張られて、「なぜか分らないのか。これは歌舞伎でも禁止になってるだろう。何で学生のくせにこんなことやるんだ」と。「これはちゃんと岡本綺堂さんのところへ行って、了承を受けてます」と言ったらば、何がいけないのかと思つたら、われわれの時は、こういう本を読んだり、芝居を見たりするのがあれ（共産思想）でしたからね。

この中で『修禅寺物語』ご存じの方いらっしゃいますか。これは岡本綺堂さんの名作の一つで、歌舞伎十八番の一

つです。今、あんまりやってませんが、たまにやることがあります。内容は源頼家が追われて修禪寺に行き、そこでお面を作るんですね。夜叉王というのが面作りですけど、その娘に桂（かつら）と楓（かえで）がいて、桂の方はやがて頼家の側室として行ってしまいうんですが、その面がなかなか出来ないのを催促されるんですが、その前に、楓は春彦という職人のさんにお嫁に入っております。その時の、「たかが面作りの」というセリフがあるんですね。たつたそれだけなんです。何でいけないのか。これは産業戦士をばかにしてるセリフだと。「今、みんな工場で働いてるんだ。それを『たかが』とは何事だ」と。たつたそれだけのことで中傷されるような時代です。そういうことが、皆さん、あるんですよね。戦争というものは、単に戦うばかりじゃなく、われわれの学問の自由も全てなくなりますが、やがて先輩は、次から次と学校を出ると、まず行くのは軍隊です。ほとんど毎日と言ったら大げさですが、壮行会をやって送りに行きました。それが最後だったって方がほとんどでしたが。

やがて我々も、昭和十八年に学徒出陣というのがあります、今まで学生は二十六歳。昔は教えですが、二十六歳までは、大学、専門学校へ行ってる者は徴兵を延期されておりました。しかし段々と下級将校が戦死してしまい、学生を全部招集しろというので徴集され、私は十月二十一日の小雨の降る中を神宮外苑、鉄砲を担いで、そして当時の陸軍大臣の前で閏兵分列があつて。周りのスタンドには中学生、女学生、女子大生が送ってくれた。今でも目に映ります。やがて我々は戦線へと出掛ける汽車に乗ります。本当に悲壮なものでした。また当時それを見送っていた女子大生だった方から「先生、あるとき私も行ってたんだけど、本当に涙が出たし、あれからどうなったんですか」と聞かれましたが、陸軍は十二月一日に入営、海軍は十二月十日に入営と。もちろん検査をして、我々は行くようになりました。

さあ、これからちょっと、今まで新聞に言ったことがありませんので、それをお話しさせて頂きます。私のいたお寺は、当時二百軒ぐらいの檀家がありました。私は昔、正治といたので、マーちゃんが戦争に行くんだと

いので、檀家の人も非常に心配しまして、やがて壮行会を開いてくれるようでして、

その前にですね、大事なことを忘れていた。宗門では臨時に、十一月七日、八日と片山日幹猊下の下に信行道場を開設しました。みんな集まって、修了すると祖師堂の前で、一人ずつ全部准講師。予科であろうが学部であろうが専門部であろうが、全部准講師の辞令をもらって、それと同時に一生懸命駆けて、早く帰らなければ軍隊に行く準備が出来ません。身延の駅で、甲府へ行く方と富士の方と別れます。どちらの電車が来ても、「ああ、これでいよいよ別れるんだな」と思って、お互いに手を握り、別れたあの姿。それつきり戦死してしまって、会えない方もいらっしやいます。また、私のようにこうやって残っている者もいる。あのときは本当に忘れることができない一つです。元へ戻りますが、十一月になるともう入営が近づいてしまいます。皆さんね、親子の別れ。私は、親父というものが怖かったです。本当の父親じゃないと思うぐらいに、お経を教わるにも殴られ、小さい時はお灸も据えられ、学校行くのにぐずぐずしているとドブの中へ落とされたり、「ああ、なんでこんなに……。うちの親父は本当の父親じゃない」と思ったその親父との物語なのです。

壮行会も方々でありますから、終電車で帰るので遅くなります。ある晩、帰ってきましたらば、灯火管制ですから暗いのです。玄関をガラツと開けて上がったらば、茶ノ間に父親が一人こたつへ入って「おお、お帰り」。「お父さん、こんな遅くまでどうしたの」と言ったら、「うん」。「もうこんな遅いんだから、寝た方がいいですよ」って言うのと、「うん」。何を言っても「うん、うん」しか言わないので、しょうがないから私も「じゃあ、もう私寝ますから、お父さんも寝てください」と言ったら、「うん、ちょっとな」と。「何ですか」「ここへ座れよ」と、おやじの前に座ったら、「いや、お前と一杯飲みたいと思うんだよ」と言って、お燗を付けてくれて、父親とぼつぼつと飲みました。恐らく二度と親子で飲むこともない、死に行くのだなと思ったのでしよう。

最後に何と言うかと思ったら、「正治や、もうお寺に借金は無いから、心配しないで奉公してこいよ」というの



でした。

実は私のお寺は、関東大震災で潰れてしまいました、当時檀家が六十五軒しかないので、よせばいいのに総工費を六万五千円もかけて建てたものですから、大借金でした。毎日、借金返しに、お経に歩かされたものです。お施餓鬼も終わると、翌日は借金を取りに人が並んでるんです。早く行かないと取り損なっちゃうと思って、それが全部返し終わったから、もう心配しないでご奉公してこいという意味だったのです。軍隊に行くときに、奉公袋って持っていますよ。その袋の中に色々入れて持って行きます。ご奉公ですよ。そんなこともありました。

そして檀家さんが開いてくれる壮行会です。ところが、そこで食べるものが何もないのです。その時、横須賀の方の魚屋さんから電話があって、「壮行会だけ何もないだろうから、イワシが一杯あるから取りに来ないか」と。昔は車がないですからね。そのとき私は、ぜひ行きたいと思っても、一人では行かれません。何しろ十キロぐらいりやカーを引いて、横須賀の三春町ですから、そうした時、法勝講の講元が割とお年を取ってましたが、「マーちゃん、一緒に行こうよ」と言ってるりやカーを引いて行って、重かったです。それを二人で何回も休みながら引いて、夜、御馳走としました。

それから、私は、川崎の東部第六十二部隊というところに入隊。しかし、軍隊に入るのに、遠くの方の人がいるから、一日早く十一月三十日に学徒へ行く者は小学校へ集まれということ、集まることになりました。昔は、いわゆるお宮、村の鎮守様へみんな集まって、そこでお参りをして、歌を歌って送ってくれるんです。私も学生服のまんま日の丸を締めてそこでお参りして、「じゃあ、行ってまいります」必ず決まっていますのが、日の丸で歌を歌って、勿論のほり旗もありますが、「天に代わりて不義を討つ」と、国防婦人会だとかいろんな人が歌うんですが、私がお宮を下りて鳥居を出たら、大勢人がいるのですよ。よく見たら、みんなお寺の講中と檀家の人でした。「ああ、檀家の人がこうやって送ってくれるんだな」と思って、やがて通りを、約四キロありますが、近所の小学校まで旗を振って



歌いながら行きました。そして途中、交番の前を通ったら、ガタガタッとそのわきから前に出ていった者があります。それまた全部うちの檀家さんです。最初に南無妙法蓮華経というあの玄題旗を先頭にして、みんなが「天に代わりて不義を討つ」というのに、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と、太鼓を打ち始めた。そうすると、太鼓の方が強いのですから、国防婦人会にしても、送ってる人も、みんな「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と言って日の丸を振るのです。私はあの時は、どうしようかなと思ったが、ありがたいなと。檀家さんは、やはり俺が死んだらば困ると思つて、あるいは何とかして助けたいと思つて、こうしてお題目を唱えて送ってもらつたのだと。半分気が狂つたかと思うぐらいにお題目を唱えて、約四キロの道を歩いて送ってくれました。学校へ着いた時には、他の方との釣り合いがあると見えてやめました。

ところが、私の場合は近くからの入隊だったので、係の人が「今夜はどっかへ泊まってください。その代わり、明日は一番に来て下さい」と言われました。翌の十二月一日の朝、親父とお袋に挨拶して、玄閼に降り、一番電車で行かないと間に合いませんからね。その時、ガラッと玄閼を開け、おじいさんが入ってきました。檀家の岡本為吉さんという方で、重箱を持っていて、「今日はマーちゃんが兵隊行くんで、最後になるから、これを食べて行けよ」と。蓋を開けたらポタ餅だったんですね。私がポタ餅を好きなことを知ってましたから、また上がることも出来ないのので、その場で「それじゃあ」と言つて、一つそのポタ餅を食べた。まだ小豆が熱かったから、また上がることも出来ないので、ポタ餅を食べる最後かなと思つたけど、檀家の方は最後だと思つて朝早く起きて、ポタ餅を作つて食べさせようとして来た。あの気持ちというものは、本当に尊いものだと思います。

今、皆さん、どうでしょうか。檀家の人は、お寺で何か通知したつて、来ない人も多いです。太鼓も叩けない人もいます。昔は、本当に檀家の人が何とかして若上人を助けたいという一心でお題目を唱え、送ってくれたあの気持ち。私は、「ああ、俺は死んじやいけない。何とかして生きて帰つてきたいな」また帰ってくるのだということを決意し

たわけでございます。これは新聞にも載せてないし、しゃべったことはないんですが、今日は皆さん方に、私のあつたことをお話しさせて頂く機会でございます。

さて、軍隊というものはひどいもので、最初は歩兵で入ったんですが、幹部候補生になってから幹候中隊に入った時に二人で呼ばれ、立川にあった陸軍航空技術学校という学校へ移れということで、飛行機の方に回されてしまった。軍隊の話は長くなりますので省きますが、殴られ蹴られ、ここで死ぬのかなと思うとちょっと情けない点がありました。が、本当に大変な思いを致しました。

さあ、いよいよ学校も終えて転属になります。みんな夫々、ばらばらになって行くんですが、飛行第一〇二戦隊という戦隊が三重県の鈴鹿の下にある北伊勢にありまして、私はそこに転属しました。毎日毎日飛行機をいじって、特に名古屋の空襲に出ていったんですが、その内に、もう一つ何か知らないが出撃をするみたいなんです。何かは薄々分かって来てはいました。さて、軍隊は検閲がないと手紙を出せません。しかし、私は懇意にしている家がその近くにあったものですから、その方に頼んで実家に手紙を出しました。「近いうちに出撃するようだ」と。それが元旦の日に着いたものですから、家の中が大騒ぎになって、忘れもしません。昭和十年の一月十日でしたかね。名古屋の空襲中でした。私の飛行機が片脚が出ないで大騒ぎしてる時に、「おい、三田村、面会だぞ」と。「誰だ、こんなに面会に来る奴は」と言ったら、親父とお袋と妹の三人がいました。親父が最初に言った言葉が、「正治や、大変なことをしてしまつたよ」と。大変なことをしたって何だろうと思つて、「お父さん、何ですか」と言つたらば、「お前と別れの杯をしようとして、お正月の配給の酒を飲まずにいて、魔法瓶に入れて持つて来たけど、名古屋で乗り換えをした時に忘れて来ちゃつたんだよ。」そこでお袋が怒つて、「何ですか、別れの杯とは。この子は絶対に死にはしません」と言つて、お袋とその場で大喧嘩になつちゃつた。「お父さん、航空隊には酒はいっぱいあるんだから、伊藤さんの所へ行っててくれ」と話して、もし今夜空襲が無ければ、行くことは出来るからと言つて、その夜に行った

ことがあります。

だから、私がこうして今日いるのも、檀家のみんなが必死になって送ってくれたこと。また、その間お寺へ集まって私の武運長久を祈ってくれたこと、そして、お袋が陰膳を据えてくれたこと、そういったお陰で、今日の私があるのではないかと思っております。

ただ、戦争は怖いなと思う。ちやうど「天一号作戦」といって、沖繩の作戦が始まって、あくまでも私たちの戦隊の任務は特攻機を援護していけばいいんだと。援護の役目だということで、宮崎県の都城の西飛行場、隣は鹿屋という海軍の特攻基地がありまして、そこへ行ったわけです。やがて七月の初めになって、どうもおかしいなと思っていました。皆さんはね、特攻というのは上からの命令だと思ってしまう。命令じゃないんです。全部志願なんです。一〇一、一〇二、一〇三戦隊とあって、ある時この戦隊に上層部の方から探りが入ったんですね。兎に角、戦隊長が代わったから、垣見という少佐でしたか、おかしいなと思ったらば、いわゆる自隊特攻といって、一〇〇飛行団は全部特攻になるということを上申したわけです。そこで私達の戦隊長は話が違うと言って拒否したらば、再編をされて、今度は飛行隊長が戦隊長になったから、とうとう特攻隊員になってしまいました。自隊特攻といって、いわゆる戦隊が特攻を志願したんだと。

さあ、今度は特攻に行く者達ですよ。誰だって特攻だと思わなかったから迷いました。それであの時、紙を渡されたんです。これから特攻隊、特別攻撃隊を編成する。だから、みんな自分の遺書を書け。拒否する者、それから希望する者、熱望する者、この内どれかに丸を打てと。みんなもじもじしていたけど、「まさか拒否はできないしな。」と、とうとう全員が希望、あるいは熱望してしまったから、その中から特攻隊が出来てしまった。要するに、全員が特攻だということになったわけですね。

第一次のとき、四月七日ですが、大成功しました。この時は、海軍の第六航空軍からも感謝状が来て、私はその時

は出ていませんでしたけど、それこそ大変な騒ぎです。暫くして四月二十九日は、天長節だから、きっと御馳走がいっぱい出て我々を祝ってくれるものと思つたらば、特攻に出ている為に、グラマンが来る。それから、B二九が来て大空襲で、戦隊は、飛行機はもちろん、格納庫、弾薬庫、兵舎、ことごとく全部やられました。我々の何人かもやられたわけです。私は、この新聞に出ていますように、福島という北海道の学徒兵と一緒にタコ壺の中いたんですが、私は怖くて「向こうへ行こう」と言った時また、爆撃が来たもので、目と耳を塞いで入っていました。ザアツという音がした泥や石をかぶり、目を開けて、福島は向こうに行ったのかなと思つて見たらば、そばの木にぶら下がって死んでいたわけですね。だから、とにかく一つ一つお話はできませんが、戦争というのは絶対にやっつてはいけません。何て言うんですか、相手がアメリカであろうとどこであろうと、向こうはやっぱり日本を敵として来る、どっちがやってもやらなくても、戦争というものは、自分一人ばかりでなく、全てのものに全部、影響してきます。私ね、たまたま石橋湛山先生のお話があるというので、お読みになった方あると思いますが、色々本を買って見てたんですが、『戦う石橋湛山』という、有名な半藤さんが書いた本を買って読んでみたんです。石橋先生も、ご子息さんが戦死されているんですね。私も知らなかったのですが、こういうことを先生が書かれています。

私は、昭和十九年二月、一人の男児をケゼリン島において戦死せしめた。一年遅れてその公報を受けた私は、昭和二十年二月彼のために追弔の会合を催したが、その席上でつぎの如く述べた。「私はかねて自由主義者であるために軍部及びその一味の者から迫害を受け、東洋経済新報も常に風前の灯の如き危険にさらされている。しかしその私が今や一人の愛児を軍隊に捧げて殺した。私は自由主義者ではあるが、国家に対する反逆者でないからである」と。

私も、私の死んだ子供も、戦争には反対であった。しかしそうだからとて、もし私にして子供を軍隊に差し出すことを拒んだら、恐らく子供も私も刑罰に処せされ、殺されたであろう。諸君はそこまで私が頑張らなければ、

私を戦争支持者と見なされるであろうか。東洋経済新報に対して帝国主義を支持した等と判決を下されるのは、正にそれであると私は考える。

抜粹 半藤一利著『戦う石橋湛山』二八六頁

湛山先生の子供が戦死なさつてることを知らなかったです。確かにこれを拒否した場合、或いはもし脱走した場合、自分ばかりでなくして、家中の者、親戚の者、全部国賊として、本当に村八分どころではない、日本にいられない、あるいは死んでしまわなければならないような時代になっていたんです。

さて、皆さん、時間が参りましたので、先ほど分科会の全ての報告を聞いて私が聞きたいと思ったこと、また言わんとしたこと、それぞれの分科会で話し合った内容に大変ありがたく思った次第でございます。これをこのままで終わらさないで欲しいと思います。戦争についてお話しすれば切りがありません。いかに悲惨で、自分一人ばかりでなく、家族、親戚、全てが大変苦労しなければなりませんので、絶対にやるべきじゃない。

今は日蓮宗では、先ほどもご報告にありましたように、総長猥下が文章を『日蓮宗新聞』を通じて出したわけです。それから、昨日も読みましたが、世界立正平和会があります。私もちょっとこれを見てみたんですが、これは、現在では日蓮宗規程第一号の宗務院規程の中に入っちゃってますね。

(立正平和運動本部)

第十八条 宗務院に、仏性開顕、皆帰妙法の祖願に基く不編中道の世界立正平和運動を行うため、世界立正平和運動本部を置く

それからずっと、本部長は局長であるとか、各宗務所に支部を置いて、宗務所長が支部長であると。色々書いてあるんですが、これらのものがどのようにして具体的に動いているか。

確かに世界立正平和もあるという事は、度々いろんな所で耳にし、また聞いておりますが、具体的に何をしてるんでしょうか。これで、これだけの戦争というものが終わるんでしょうか、しないで済むんでしょうか。私はやはり、折角こうして皆さん方が意見を出し、また何とかしようという気運がありますので、是非この点についても、もっともっと議論をお願いしたいと思います。

また、本宗には法華一乗会というものがあります。しかし、何からのお話もありません。昨日、今日と色々協議されたことの、分からないことがたくさんあります。私自身も、口では言っているけれども本当に分かりません。ただ、戦争経験者として、何とかして戦争だけは防がなくてはならない。絶対に殺し合いはしたくないという、幾ら自衛だといっても、やっぱり殺さなければならぬ。また、逆に殺されちゃならない。これは絶対に避けるべきなのです。もう少し分かりやすく話し合う機会がないのかなと思っている次第でございます。

今後、皆さん方は大変お若い方が多いわけですが、もしこの日本がどうしても他国と戦わなきゃならなかった場合には、手を上げちゃうんですか。戦うんですか、守るんですか。どうやって守るんですか。あの時も、我々だってまだ勉強したかったけど、お国がこうだからといって、あるいは親兄弟を守る為にはと行って、どうしても戦わざるを得ない。そして、命を落としたわけでありまして。私は九十三になりました、本当に今までこのようなお話をしたことばございませんでした。しかし、皆はとっくに亡くなってしまつて、「ああ、三田村、おまえはまだ生きてるんだな」と。自分は生きている限りは、自分が生きてるんじゃないやなくて、あの時、死に行つた戦友達に生かされているんだと。また、仏祖三宝様、宗祖日蓮聖人、両親等に生かされている。

ですから、大変ハードです。ハードもハード以上です。今日、倒れちゃうんじゃないかなと思うぐらいにハードで

す。千葉から京都、みんな簡単に考えてますけどね、今日もガラガラ持ってこれから京都へ行くわけなんです、大変です。本当にハードですが、皆さん、お経の中には「不自惜身命」という言葉がありますね。口では不自惜身命と言ってますが、命懸けということは本当にやったことありますか。私は、自分は今日死んでもいいんだというような覚悟で、今はやっているわけでございます。

そういうふうなことで、ちょうど時間になりましたので、もともとお話ししたかったんですが、今日は新聞にないこと。それから、石橋湛山先生がお子さんを亡くして、その先生のお気持ちのことも一つにありましたが、戦争というのは止められません。始まったら止めることが出来ないんです。止めることの出来ないのが戦争です。また、殺し合いです。ですから、どうぞそのことがないように、ひとつ皆様方、頑張ってください。また、ちよと時間になってしまいましたので、一応これで終わらせていただきますが、何かもとお聞きしたいことがあります。りましたらば、質問等をお伺いしたいと思います。

**司会** 三田村殿下、どうもありがとうございます。それでは、ご質問等ございましたら、手を挙げていただきまして、所属をおっしゃっていただいたうえでご質問いただければと思います。どなたかいらっしゃいますでしょうか。

**質問 1** 兵庫西部の森勝亮と申します。先ほどから大変はつきりした口調で、本当にお年とは考えさせられないくらいいいお声で、ここまで届いてまいりました。しっかりと聞かせていただきました。

先ほどお話の中で、戦争は、静かに、分からないうちに始まっていくというふうに言われました。この十六日に安保法案が成立するのは、ほとんど決まりだと思えます。今、この法案が決まって、また今の政治が、石橋湛山先生が譲られた岸内閣と同じような積極的平和。今の安倍総理は私と同一年なんですけども、安倍総理が目指されている平



和論。実はこういうことにすることによって日本は守られる、平和であると主張して、この法案が通っていくわけですが、今、この法案が通ったときに、我々はどうすればいいのか。また、我々が密かにもしかしたら始まっているかもしれない、どこかで集団的自衛権が執行されて、どこかでもしかしたら、ドンパチが始まってしまいかもしれないという時に、我々は何の様に対処していったらいいのか。我々がすべきこと、三田村殿下のお考えをもう一度お話をさせていただければと思います。

三田村 なかなか難しい問題ですが、私はね先ほど申し上げたように、日蓮宗はやりません。今、参議院でしてるデモなんですけど、日蓮宗の人たちはおりません。私はね、日蓮聖人であったならば、必ずこういったことについて、「やめろ」ということを直訴したと思うんですよ。今、法華一乗会や何とかがあります。やはりそういった国会を動かすような力を持たなければ、だめだと思ってます。信念を持って。ただ、ここで言ってもこれで終わっちゃいます。戦争が始まったら終わりです。戦争まで行かなくても、これが通ったならば、必ず皆さん方、このまま通っていいのかと。

確かに自衛はありますが、自衛といっても、せっかく憲法の九条があつて、我々は戦わないんだと。世界でこんな素晴らしい憲法はありません。それをどこまでも愛したいなと思ってるんですが、私はデモじゃなく、何とか方法を取って、国に、政府に直訴するぐらいのことをやらなきゃだめだと思ってますが、いかがでしょうか。

質問 1 ありがとうございます。

司会 よろしいでしょうか。他にどなたかいらっしゃったら。どうぞ。

質問2 山形県の玉木と申します。実は私の寺は武家寺でして、上杉家の。以前、特攻の方にも話を聞いたことあるんですけども、必ず今、一生懸命生きていけば、来世は、あるかないか分からないけれども、ひょうひょうとして死ぬるといふことをよく軍隊経験者の方から聞きましたけども、われわれ仏教者は来世をどういふふう理解したらいいかなというのをずっと考えておりまして、三田村猥下は、来世とか、その特攻のときに考えられましたか。

三田村 何ですか。

質問2 来世、今世ですよ。来世、あの世というか、その存在というんですかね。

三田村 飛行機っていうのはね、非常に私は飛行時間も少ないし、下手くそだったもんですから、さっき出たんですが、私たちの戦隊はキの八四といって、「疾風（はやて）」という一番いい飛行機を持ってたんです。ところが、私みたいなアレはだめで、最初から学校のと時から「おい、三田村、おまえのやつはこれ」と言ってる、九七戦でした。これは、ノモンハンではだいたい活躍したそうですが、プロペラが一枚。ですから、普通のハヤブサとかなんかで行けば沖縄まで二時間で着きますが、九七戦は着かないと思います。順調に、もし着くとしても二時間半です。

しかし、「爆弾、爆弾」と言うけど、飛行機というのはどこに二百五十キロとか三百キロ積むと思いますか。戦闘機は、燃料は全部両翼に入れるんです。羽の中に燃料を入れるんです。ところが、それじゃ足りないんです。ですから、補助タンクといって、胴の下のところにもたまたガソリンを入れるんです。最初にこの補助を使って、途中で落としちゃって、それから今度、最後に両翼にある燃料を使うわけです。ですから、私はよく言ったんですよ。「オイ、片道分だけじゃなくて、目一杯入れてやれ」って、とにかく兵隊が来て爆弾を入れると、その重さだけで大変です。

戦闘機というのは、空中戦をやるためにあるんですよ。最後の方は銃まで撤去しちゃう。戦えないでしょう。九七戦ですとね、私も実際にやってみたんですが、パタパタ、パタパタと、離陸するときは風が上がるみたいで、「大丈夫かな」と思いますよ。それでやっと上がっていくわけです。

ですから、今のご質問のように、特に陸軍は、洋上訓練といって、海の上が怖かったです。最初は毎日毎日海に行っていました。海はなぜ怖いかというと、もし何かあっても降りる所が無いわけですよ。そうでしょう。陸の場合には、仮にダメになるにしても、どこか降りられるなという一つの安心感があります。そのために、非常に陸軍は特攻。大体最後の方は、ここに書いてきましたけど、敵はリーダーの中に有る、奄美大島からあの辺になると、上から降りてきます、グラマン。だから、とても敵いません。最初は成功したけど、最後は十機行って一機やればまあまあいい方で、ほとんど全部だめです。そういうあれなんです。

それで、逃げてくると言っては怒られちゃうけど、私なんかそのうちの一人ですけど、本当に故障すれば一番いいんですけど、そうじゃなくてもやっぱり……。後で分かったことですが、帰ってきたのは皆、大分の収察（振武寮）に終戦まで入れられていて、人間以下の扱いをされていたということが分かって、本当にびっくりしたわけです。よろしいですか。

**質問2** ありがとうございます。

**司会** もうそろそろお時間となりましたので、いま一度、三田村殿下に大きな拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

三田村 どうもありがとうございます。皆さん、頑張ってください。私も、この会議に出ることができて、大変嬉しく思っております。皆さん方に大いに期待をしておりますので、今後、このような機会が続くことを是非心からお願ひ致します。終わらせて頂きます。ありがとうございます。もう一度、亡き戦友たちのため、また亡くなった人のために、お題目を一唱させていただきます。お願い致します。

南無妙法蓮華經。

司会 三田村 祝下、ありがとうございました。